

は当時の旅装には必須のものとして広重、英泉の筆になっている。

これらほとんどが突然にこの時代に現われたものばかりではなく、古い時代にあったものに手を加えたと考えられるものが多く、どのような時代においても衣生活に関して要求するものの根底のかわらないものであることを確信することができた。

B-57 浮世絵に現われた被服（第5報）

—かぶりものおよび履物—

四天王寺女子短大 大川原千鶴

1. 浮世絵に現われた被服について研究発表を重ねてきたが今回は、かぶりものと履物について考察したので報告する。

2. 浮世絵の中に描かれている「かぶりもの・履物等」がいかなる時代背景の下に世に出たか画材を通して考察した。

3. 浮世絵に現われた主な題材は歌舞伎と遊里であるから、かぶりものも履物もこれらが流行の源となっているが、これが当時のすべてではない。しかし庶民はこの両者に傾倒した時代であったから限られた一部のものの被服と考えるよりもむしろ当時の被服と考えた。幕府の命によって月代をそられた名女形達はこれを隠すことに苦心して考案した野郎帽子はかえって人気のまとなり被服史上かぶりものの最も流行した時代となった。また今日婚礼の日の花嫁に限って用いられている角隠しは遊女達はその汚れた身を角隠しにつつんで社寺参詣している。現代においても水商売の女性は一般女性に比べ信仰心の強い者が多いが封建社会にあって彼女等が足繁く参詣したことが数多い画材の中にかがわれた。笠、草鞋